日中社会学会ニューズレター

Japan-China　Sociological　Society　Newsletter

No.75　2016.05

目　次

日中社会学会第 28 回大会
大会開催にあたって　・・・・・・ 1
大会をお受けするにあたって　・・・・・・ 2
記念講演のご紹介　・・・・・・ 4
開催校企画シンポジウムの紹介　・・・・ 5
中日社会学学会専門委員会設立記念シンポジウムのご紹介　・・・・・・ 5
自由報告セッションの紹介・・・・・・・ 6
大会プログラム・・・・・・・・・・・・・7
中国便り―生活の中からの社会学
北京事情：中学校の母親ボランティア　・・・・・・15
会員の研究動向コーナー　・・・・・・・16
新入会員の声　・・・・・・・・・・・・・ 18
事務局からのお知らせ　・・・・・・ 18
事務局からのお願い　・・・・・・ 19

■日中社会学会第 28 回大会開催にあたって

日中社会学会会長

首藤明和（長崎大学）

日中社会学会第 28 回大会が 6 月４日と５日、長崎ブリックホールにて開催されます。日中社会学会大会の歴史のなかでは初の九州開催となります。開催に向けてご尽力をいただいております関係者の皆様には厚くお礼を申し上げます。

今大会のプログラムもまた、たいへん充実した内容です。記念講演では、日本学士院会員で文化功労者の斯波義信先生にご登壇いただきます。また、昨年末の中国での中日社会学学会専門委員会の発足を祝して、記念シンポジウムを開催します。さらに、越境をテーマとしたシンポジウムや自由報告では、さまざまな知見や課題、展望が示され、多くの発見を私たちにもたらしてくれることでしょう。

毎年、新しい会員をお迎えしながら、日中社会学会は日々更新を続けております。本日は学会の歴史について簡単なご紹介をさせてください。本学会は、1980年、日中両国の社会学界の交流を図り、両国の社会学の発展に寄与することを目的として設立されました。学会草創期、社会学の日中学術交流の礎を築くために、故福武直東京大学名誉教授を団長として２度の訪中団を結成し（1982年、1989年）、中国社会科学院社会学研究所や人口研究所、北京大学社会学系、人民大学社会保障研究所、上海社会科学院社会学研究所、上海大学文学院社会学系、復旦大学人口研究所など、中国の社会学・人口学・社会保障関連の研究機関を表敬訪問しました。ご存知のように、福武先生と費孝通先生の交友については、両先生の随筆・回想のなかでも述べられています。この学会草創期には、定例事業として年数度の研究会開催および機関誌『日中社会学会会報』発行をおこないました。

第２８回大会　会場：長崎ブリックホール（JR 浦上駅徒歩５分、バス茂里町停留所徒歩３分）

平成２８年６月４日（土）　１２：００～１８：３０（受付　１２：００）

６月５日（日）　９：１５～１６：１０（受付　９：００）

大会参加費　会員、非会員とも　2000 円（ただし学生は 1000 円）

懇親会（ベストウェスタンプレミアホテル長崎）４日１９：００～　一般 4000 円・学生 3000 円

※ 出欠確認はがきは、52 円切手を添付の上、5 月 20 日(金)までに投函をお願いします。

その後、1989年には第１回研究大会が開催され、2015年６月には第27回研究大会が開催されています。1991年、本学会は第15期日本学術会議の登録団体に認定され、今日に至るまで継続して登録団体の認定を受けています。

1993年、『日中社会学会会報』を廃刊、新たに機関誌『日中社会学研究』第１号を刊行し、2015年８月には『日中社会学研究』第23号が刊行されました。2008年６月には、本会活動のさらなるグローバル化を目指して、論文執筆言語を日・中・英で可能とした『21世紀東アジア社会学』創刊号を刊行、2015年５月には第７号が刊行されています。「日中社会学会ニューズレター」は、2015年10月までに第74号が発行され、数万字に及ぶ記録・資料の集積体を形成しています。

その他、学会設立当初からの念願であった、中国での研究集会開催についても、2009年３月には中央民族大学民族学与社会学学院社会学系との共催で日中社会学学術検討会「中国研究の可能性と課題」を開催、2009年９月には首都経済貿易大学との共催で「中日経済・社会国際学術フォーラム」を開催しました。さらに、国際交流基金「知的交流会議助成プログラム」の助成を得て、2011年度には「国際円卓会議シリーズ『東日本大震災とその後――災害・復興・防災の日中比較を通じた新しい社会の模索』」、2012年度には「国際円卓会議シリーズ『グローバリゼーション・インパクトの日中比較研究』を東京や仙台、北京などで実施しました。

こうして、日中社会学会は、多くの方々のお力に支えられながら、研究や教育の交流の場を提供してまいりました。会員数では中小規模の学会、予算額などは小規模の学会に過ぎませんが、幸い、会員諸氏と志をともにすることで、限られたリソースにもかかわらず、たくさんの方々に学問を通じての自己実現の機会を提供することができたのではないかと感謝しています。

いつも申し上げていることですが、国際情勢のあれこれにかかわらず、本学会の歴史や研究報告の活発さからは、学術交流のみならず人間的な交流の確かな歩みと力強さを感ぜずにはおれません。このことこそが、トランス・ボーダーなグローバル・イシューへ対応するための基盤なのであり世界にとっての財産だと思います。

今後もまた、本学会が誰に対しても居場所が開かれた学会として発展していくことを願っております。そして、この長崎大会での研究交流が、会員諸氏にとりまして有意義な時間になりますよう、また学術の一層の発展と、アジアひいては世界の平和に寄与することを願ってやみません。多数の皆様のご参加を心待ちにしております。

■第 28 回大会をお受けするにあたって

第 28 回大会実行委員長
首藤明和（長崎大学）

第 28 回大会は、先の会長ご挨拶でも述べさせていただきましたように、日中社会学会の大会としましては初の九州開催となります。そして、日本と中国の交流史のなかで、眩いばかりの光彩を放っていた長崎での開催となります。

この長崎というところをどのようにご紹介したらよいのか。少し悩みましたが、結局、原田伴彦先生『長崎』（中公新書，1964）の一節「長崎の二つの顔」をお借りしてご紹介することにしました。

赤い花なら曼珠沙華
オランダ屋敷に雨がふる
ぬれて泣いてるジャガタラお春
未練な出船の　あゝ鐘が鳴る

（「長崎物語」作詞・梅木三郎、昭和 13 年）

長崎をまだ見ぬ人々は、長崎の町に浪漫的な幻想を夢みる。そして、ひとたび長崎に遊んだ人人は、またいつの日か、ふたたびここを訪れたいと心におもう。長崎は不思議な魅力をもった町である。

長崎は、文明史的にみれば、二つのいちじるしい特色、いわば「二つの顔」をもっている。

ひとつは、西欧文明と大陸文物が、長い歴史を背景に混然と融合した、日本でただひとつ、国際性豊かな珍しい町だという点である。

天主堂に輝くクルス、アンジュラスの鐘、灰色の甃舗、南蛮更紗、ギヤマンの壺、オランダ皿の花模様、唐寺の朱の楼門、媽祖堂の赤い蝋燭、南京花火、異邦人の墓碑銘、卓袱料理、カステラの味、鼈甲細工、etc……は、今も妖しげなエキゾチシズムの香りを長崎の町々に漂わせている。（中略）

第二の顔は、長崎が「市民の町」であったという点である。（中略）江戸時代になって、日本の都市のすべてが、きびしい封建支配のくびきの下に屈伏させられた。しかし中世の市民的伝統は、庶民の町大坂とこの長崎にのみわずかにうけつがれた。

とにかくそれは長崎においていちじるしかった。（中略）長崎は江戸時代に、幕府の直轄領として、長崎奉行の支配下に置かれた。もちろんその形式的統制はきびしかった。だが、実際は町人の勢力と発言権のほうが強かった。町の政治は、「年寄」を中心とする町人の合議制によって事実上運営されていた。奉行が手をこまぬけば市政は無為にして治まり、奉行がこれに干渉すれば非難がたちまち四方におこって、ついに奉行は解任のうき目にあった。「御老中でも手の出せないものは、江戸城の大奥と長崎である」とさえいわれた（前掲書: 8-12)。

ここでは、長崎の歴史を貫く縦糸と横糸は、異国的情緒と市民的開明性に見出されています。思うに、こうした糸を織りなす原動力とは、外の空気を受け入れる開放的性格にあり、こうした力は幕末維新に最高潮を迎えたのでしょう。長崎の魅力とは、外からやってきた人びとがやがて去っていくその流動性にこそ存在したのです。それゆえ、流動性を失った長崎はかつての長崎ではなくなってしまいます（例えば、フローを喪失したなかで「軍艦島」を世界遺産として誇ることは、長崎そのものの魅力を自己否定します。フローの事実を直視し、その経験を語り継ぐ度量を長崎には求めたいと思います)。

さて、こうして長崎に来られる皆様方は、かつてフローのなかで培われた長崎を蘇生し再生する主人公に他なりません。歴史的には多様性と開放性を色濃く持っていたとされる長崎ですが、その後の変遷はいかなるものであったのか、現在のグローバリゼーションのなかでいかなる可能性を持っているのか、いろいろと感じていただける機会になると思います。

この度の長崎大会は、長崎ブリックホールを会場にして２日間の日程で開催します。大会実行委員は長崎大学多文化社会学部に所属します。本学部には例えば「オランダ特別コース」が設けられ、オランダの言語、社会制度、文化を学ぶことのできる日本で唯一の教育プログラムを提供しています。今回は学部校舎が大規模な改修工事を行うために、残念ながら大学キャンパスでの大会開催とはなりませんでした。

大学に代わって大会会場となった長崎ブリックホールですが、JR 浦上駅から徒歩５分、路面電車やバスでは茂里町停留所より徒歩３分、また、長崎空港からも４番乗り場の高速バスに乗れば茂里町に到着します。ブリックホールの周囲には、江山楼といった長崎を代表する中華料理店や、みらい長崎ココウォークといったショッピングモール、コンビニなどもあって、比較

的便利なところです。

大会一日目の記念講演、開催校企画シンポジウム、および総会は、ブリックホール３階の国際会議場で開かれます。国際会議場は 400 人以上の収容が可能な大ホールです。皆様お誘い合ってのご来場を心よりお待ちしております。

（記念講演のご紹介）

記念講演では、斯波義信先生にご登壇をいただきます。日中社会学会としましてはたいへん名誉なことであり、ひじょうに喜ばしいことと存じます。

斯波義信（しば よしのぶ）先生は 1930 年 10 月 20 日東京生まれ、1953 年東京大学文学部東洋史学科卒業、55 年同大学院人文科学研究科修士課程修了、61 年熊本大学法文学部助教授、62 年東京大学より文学博士「宋代における商業的発展――宋代商業史のための基礎的研究」、69 年大阪大学文学部助教授、79 年教授、86 年より東京大学東洋文化研究所教授と同大学院人文科学研究科教授、88 年から 90 年まで東大東洋文化研究所所長、91 年から 2001 年まで国際基督教大学教養学部教授、01 年財団法人東洋文庫理事長 （07 年から文庫長）、03 年日本学士院会員、04 年瑞宝重光章受章、06 年文化功労者、07 年大阪大学名誉教授。

ご専門は中国経済史、特に宋代の商業史や華僑・華人研究などで数多くの著書・論文を著されております。代表的な著書として、『宋代商業史研究』(1963)、『函館華僑関係資料集』(1982)、『宋代江南経済史の研究』(1988)、『華僑』(1995)、『中国都市史』（2002）などがございます。

斯波先生のご研究がたいへん魅力的なのは、大きく分けてふたつの理由があると考えます。ひとつは、近現代史のみならず中世史研究からのご知見にも基づかれながら、グローバル・ヒストリーの流れのなかで華僑・華人像を捉えることで、そのダイナミックな析出をなさっておられること。もうひとつは、非常に緻密で高度な学際研究のなかで経済史、都市史、華僑史などを論じておられることです。文献学はもちろん、社会科学の方法論、地理学あるいは人類学的な事例研究、エスノグラフィーなども駆使されて、詳細なデータのなかから事象の規則性を見出し、総合的な判断を下されています。

斯波先生は、社会学など社会科学に対する眼差しは優しく、大きな期待を抱いてくださっていることが文章の端々から伝わってきます。例えば『中国都市史』のなかでは「中国内地都市の新研究において最大の隘路をなしているものは、社会科学を参照枠とする研究が求めるような、全空間を見渡した立論に必要な制度面、実体面の知識が、歴史時代でもまた近現代についてもまだまだ不十分だという点である」(317 頁)と述べられています。かえって、こうしたお考えに触れてわが身を振り返ってみると、社会科学としての社会学に携わる上でこれだけの大きなビジョンを持って研究をしてきたことがあるのか自問せざるを得ません。また、恥ずかしながら、まったく自信を持てない自分自身の姿が自覚されるだけです。

今回、斯波先生には、歴史学と社会学の対話について、そして長崎にかかわって華僑研究の可能性にも触れてご講演を頂戴できないかお願いを申し上げました。その結果、戴いたご講演のテーマは「中国の商業・華僑研究と社会学」です。ここに、斯波先生の実直なお人柄と学問に対する飽くなき探求心を見る気が致します。

できるだけ多くの方々に、斯波義信先生のご講演をお聞きいただきたいと、切に、心より願っております。歴史学の泰斗が贈られる社会学へのメッセージを、ぜひお聞き逃しのないように！

（開催校企画シンポジウムのご紹介）

開催校企画シンポジウムの共通論題は「越境を考える――その課題と可能性」としました。その趣旨は以下のようになります。

今日の私たちの「存在」は、現存の境界線の上を生き続ける姿に見出せます。つまり、移り行く時のなか、空間と時間、差異と同一性、過去と現在、内と外、包摂と排除などが複雑に交錯し絡み合う形象の中に、私たちは存在します。当然、主体の位置に関する「認識」も新しい動きの中にあります。それゆえ、人種、ジェンダー、世代、組織、地政学的地域、性的欲望のあり様など各カテゴリーを単独に取り上げて社会や文化を認識することは、すでに過去のものとなりつつあります。代わりに必要となっているのは、文化の差異が分節化される際のプロセスや契機への注目です。

この差異の領域が輻輳したり置換されたりすることで現れてくる「裂け目」こそは、私たちに主体の位置に関する問いかけを許す空間です。すなわち、固定されたアイデンティティの表示を繋ぐ裂け目こそが、文化が交雑する可能性を開示する空間であり、所与のものとして押し付けられてきた非対称的な階層秩序とは異なる差異のあり方を構想し構築する実践的空間となります。

「裂け目」や「あいだの契機」に創造的に介入していくこと。こうした「越境」をめぐる考察からは、いかなる課題と展望が導き出せるのか、考えてみようと思います。

ご報告は、中日社会学学会専門委員会の初代会長である羅紅光先生（中国社会科学院）、アジア海域交流史をご専門とされ海底遺跡の発掘調査もなさっておられる野上建紀先生（長崎大学）、帰国華僑のアイデンティティの多元性について研究されてきた奈倉京子先生（静岡県立大学）、長崎華僑・華人の歴史や社会構造に詳しい王維先生（長崎大学）、「中国帰国者」における境界文化の生成とそのポリティックスについて研究されている南誠先生（長崎大学）にお願いいたしました。そして、討論者として西原和久先生（成城大学）、櫻井義秀先生（北海道大学）、また司会を中村則弘先生（長崎大学）にお願いいたしました。

広く立体的な視野のなかで重厚な議論が交わされるとともに、突破力をもつ新たな展望が示されることを大いに期待したいと思います。

（中日社会学学会専門委員会設立記念シンポジウムのご紹介）

2015 年 10 月 17 日、18 日の両日、南京大学社会学院において、中日社会学学会専門委員会の設立研究集会が開催されました。日本からは中村則弘理事と私が参加し、お祝いの言葉を述べさせていただきました。そして、初代会長に選出された羅紅光先生とご相談をして、今回の長崎大会において記念シンポジウムを開催することが決まりました。

ここでは、シンポジウムの趣旨に代えて、中日社会学学会専門委員会の活動目的を、羅紅光会長から寄せられたメッセージ（2015 年 11 月 20 日）に基づいてご紹介します。

中日社会学学会専門委員会では学術の振興に加え、中日友好関係の増進などの事業を行うことを謳っています。社会学・人類学・民族学・民俗学・歴史学・法学・商工業管理学など幅広い研究分野の各大学・研究機構の研究者や教師が会員として参加しています。

グローバル化が進むなか、資源や利益の不公正な分配という世界的な課題が生じています。社会はそれぞれの社会構造の相違を越えて、共通した課題に直面しています。私たちは、依然として研究分野が違うことを理由に固定的な考え方に拘り、お互いに対話をせず、交流することもなければ、それは「課題の共通性」という事実を否定していることと同然です。

本学会では、交流の場を通じて、未来への対話や互恵の新しいメカニズムを探求します。手をつないで社会の調和的建設に貢献し、知識を社会発展に生かすことを願ってやみません（以上、羅紅光先生のメッセージより）。

以上のような中日社会学学会専門委員会の活動目的を受けて、日中社会学会としましても、今後、積極的に学術交流を図っていきます。今回の記念シンポジウムは、その嚆矢となることを願っております。日本と中国の社会学界が新たな局面に入ったことを、その意義とともに確かめておきたいと思います。

■自由報告のセッション紹介

大会担当理事

坂部　晶子（名古屋大学）

この二年ほど、自由報告の申し込みが 20 組を超えています。今年は、全体で 21 組のエントリーがあり、6 つのセッションを構成しています。現代中国において直接フィールドワークを行っての報告機会が求められているということでしょうか。自由報告（1）、自由報告（2）とも、大会二日目の 6 月 5 日（日）の午前を中心に開催します。それぞれの部会の趣旨を簡単に説明しておきます。

セッション A は、日中関係と歴史にかかわる部会です。近代のさまざまな段階で、民間で日本社会へと関わっているさまざまな事例が取り扱われます。

セッション B は、現代中国の世相と企業文化にかかわる部会です。中国社会の草の根レベルの最重点課題と可能性を探る機会となればと思います。

セッション C は、民族と宗教の部会です。中国社会では周縁部におかれてきた少数民族の意識や宗教活動が、現代ではどのように展開しているのかを問題化します。

セッション D は、ロングスパンでの近代と文明における中国を論じる部会です。世界的なレベルでの中国社会の特徴を位置づけようとする試みです。

セッション E は、社会福祉にかかわる部会です。高齢者介護や障害者支援の問題は、中国社会が新しく抱える社会問題の一端であり、根強い関心があるように思います。

セッション F は、教育にかかわる部会です。学校という制度内の教育や社会教育も含めて、その帰結への関心は近代的な現象であるといえます。

それぞれの部会は、今の日本社会と中国社会の関係性と人びとの関心を映しだしているものでもあります。現代は、自省的に近代化を振り返る視点によって考察される必要があるのではないでしょうか。多くのみなさまのご参加により、活発な議論が行われることを願っています。

日中社会学会第２８回大会プログラム

開催日：2016 年 6 月 4 日、5 日
会場：長崎ブリックホール３階
（注）プログラムは一部変更となる可能性があります。
当日会場にて配布される資料でご確認ください

6/4(土)	
1100	理事会　-1230
1200	受付
1300	開会式
1305 1430	記念講演 「中国の商業・華僑研究と社会学」
1445 1730	開催校企画シンポジウム 「越境を考える-その課題と可能性」
1740 1830	総会
1900 2100	懇親会 （ベストウエスタンプレミアホテル長崎）

6/5(日)	
9:00	受付
9:15 1030	自由報告Ⅰ (session A,B,C)
1040 1220	自由報告Ⅱ (session D,E,F)
1220 1330	理事会
1330 1600	中日社会学学会専門委員会設立記念 シンポジウム 「中国社会学の課題と展望」
1600	閉会式

6 月 4 日(土)

１２：００～　受付開始　　*長崎ブリックホール３階・国際会議場前ラウンジ*
大会参加費：会員・非会員とも　2000 円（ただし学生は 1000 円）

１１：００～１２：３０　理事会　　*長崎ブリックホール３階・会議室１*

１３：００～１３：０５　開会式　　*長崎ブリックホール３階・国際会議場*
開催校挨拶：首藤明和（長崎大学）
会長　挨拶：首藤明和（長崎大学）

１３：０５～１４：３０　記念講演　　*長崎ブリックホール３階・国際会議場*
講演者：斯波義信（日本学士院会員、文化功労者、東洋文庫長、大阪大学名誉教授）
題　目：「中国の商業・華僑研究と社会学」
司　会　：首藤明和（長崎大学）

１４：４５～１７：３０　開催校企画シンポジウム　　長崎ブリックホール３階・国際会議場

「越境を考える――その課題と可能性」

発表者：

「ペーパードーム―神戸のその後から」　羅　紅光（中国社会科学院）

「近世磁器生産における日本と中国の影響関係」　野上　建紀（長崎大学）

「華人新世代の中国留学」　奈倉　京子（静岡県立大学）

「長崎華僑―そのネットワーク、地域空間及び文化形成」　王　維（長崎大学）

「越境する中国帰国者」　南　誠　（長崎大学）

討論者：西原和久（成城大学）・櫻井義秀（北海道大学）

司　会：中村則弘（長崎大学）

１７：４０～１８：３０　総会　　長崎ブリックホール３階・国際会議場

１９：００～２１：００　懇親会　　ベストウェスタンプレミアホテル長崎３階

懇親会費：学生 3000 円、一般 4000 円

6月５日(日)

9：00～　受付開始　　長崎ブリックホール３階・会議室１の前

9：15～１０：30　自由報告（1）

セッションA　　長崎ブリックホール３階・会議室１

司会　南　誠（長崎大学）

「神戸華僑のアイデンティティと神戸中華同文学校

―神阪京華僑口述記録研究会編『聞き書き・関西華僑のライフヒストリー』の分析から」

門永　美保（京都女子大学）

「中国帰国者二世三世による中国帰国者一世に対する支援活動

―『自助』組織のもつ意味と役割」

郭　文琪（大阪大学）

「外国人研修生・技能実習生から見た日本の企業文化

―岐阜県で行った現地調査の結果を通して」

王　武雲（岐阜市立女子短期大学）

セッションB　　長崎ブリックホール３階・会議室３

司会　李　妍焱（駒沢大学）

「中国メディアの『世論による監督』―インターネット普及以前の状況を中心に」

西本　紫乃（北海道大学）

「中国社会における草の根 NGO と企業

―農民工権益の改善におけるパートナーシップの可能性についての考察」

袁　帥（横浜市立大学）

「異文化経営の再考―企業エスノグラフィー研究からの示唆」

朱　藝（筑波大学）

セッションC　　*長崎ブリックホール３階・会議室５*

司会　　坂部　晶子（名古屋大学）

「錯綜する民族境界―中国傣族の観光化を事例に」

林　梅(関西学院大学)

「中国浙江省における教会取締りからみた習近平政権の宗教政策」

佐藤　千歳（北海商科大学）

「北方少数民族移民第二世代のアイデンティティの形成
―中国北京の成人モンゴル人の事例分析」

賽漢卓娜（長崎大学）

10：40～12：20　自由報告（２）

セッションD　　*長崎ブリックホール３階・会議室１*

司会　王　維（長崎大学）

「日本と中国の協同組合と農村救済―比較歴史社会学的考察」

穐山　新（茨城県立中央看護学校）

「チャイニーズネスの所有と定義をめぐるポリティクス
―中華民国期の武術運動における強種と健身の対立を事例に」　池本　淳一（松山大学）

「環境・資源・エネルギー問題の文脈における中国」

尾形　清一（京都大学）・松木　孝文（大同大学）

「両義補完と生生流転にもとづく社会学を求めて―共存と調和をめぐるアジア的視点」

中村　則弘（愛媛大学）

セッションE　　*長崎ブリックホール３階・会議室３*

司会　唐 燕霞（愛知大学）

「中国都市の在宅高齢者の生活と社区サービスの実態―西安市での調査を事例に」

劉　念（神戸大学）

「台湾における障害者支援の現状と課題―NPO 活動から見える支援のあり方」

上村　明（大阪教育大学）

「高齢者施設における医養結合について―上海市を中心に」

董　申琪（大阪大学）

「中国における介護保障制度の創設に向けた取り組みと課題」

李　鳳月（大阪大学）・大谷　順子（大阪大学）

セッションF　　*長崎ブリックホール３階・会議室５*

司会　永野　武（松山大学）

「中国における高等教育グローバル化の影響」

大谷　順子（大阪大学）

「中国四川省北川県におけるディザスターツーリズム開発に関する研究―災害教育を中心に」

高　欣（大阪大学）・大谷　順子（大阪大学）

「現代中国における大学選択前までの教育投資―企業家と『事業単位』の父親の相違を中心に」

劉　楠（山形大学）

「学校を中退したあとの若者―中国農村中学校の退学者のインタビューを通して」

劉　麗鳳（日本大学）

１２：３０～１３：３０　　理事会　　長崎ブリックホール３階・会議室４

１３：３０～１６：００　中日社会学学会専門委員会設立記念シンポジウム

長崎ブリックホール３階・会議室１～３連結

「中国社会学の課題と展望」

発表者：

「グローバル化と厦門自由貿易試験区―発展社会学の視点から」

鄧　蓉（アモイ大学）

「21 世紀中日関係の深化に向けた民間文化交流の実態と分析

―「料理教室」を中心に」

張　雅意（北京第二外国語学院日語学院）

「中日農村工業化の最新進展についての比較研究」

周　偉宏（北京外国語大学）

「台湾における社会組織と高齢者の社会参加に関する研究

―揚昇慈善基金会としての事例研究」

荘　家怡（輔仁大学）

「内モンゴルの牧畜社会における資源開発をめぐる問題に関する研究

―ダルハン・モーミンガン旗の事例より」

楊　常宝（内蒙古大学）

「地域社会における草の根 NPO の成長と困難－事例研究に基づいて」

鄭　南（吉林大学）

討論者：西原和久（成城大学）・中村則弘（長崎大学）・南裕子（一橋大学）・
李妍焱（駒澤大学）・唐燕霞（愛知大学）・坂部晶子（名古屋大学）・
尾形清一（京都大学）

司　会：首藤明和（長崎大学）

１６：００～　閉会式　　長崎ブリックホール３階・会議室１～３連結

大会担当理事挨拶：唐燕霞（愛知大学）・坂部晶子（名古屋大学）

大会実行委員長挨拶：首藤明和(長崎大学)

次年度大会開催校挨拶

■大会出欠確認のお願い

同封の葉書にて、大会出欠のご予定をお知らせください。52 円切手をご用意いただき返送をお願いいたします。開催校の準備のため、5 月 20 日（金）までに投函をお願いいたします。

■宿泊施設及び食事について

長崎市は比較的コンパクトな規模の観光都市で、宿泊施設は多数あります。ただし、昨今の旅行ブームのこともありますので、お早めに各自でご手配いただきますようお願いいたします。

長崎市内の移動は路面電車が頻繁に出ていて、わかりやすく便利です。会場の長崎ブリックホールに最寄りの「茂里町」停車場へは、長崎駅周辺からは約 10 分、新地周辺からは約 20 分、グラバー邸周辺からは「築町」停車場乗り換えで約 30 分の所要時間です。

タクシーから会場へは、駅や新地周辺のホテルであれば、1000 円～2000 円程度です。

大会会場での食事は、ブリックホール近隣のココウォーク（ショッピングモール）に飲食店が多数あります。また、コンビニも近くにあります。

■大会連絡先

〒852-8521　長崎市文教町１－１４　長崎大学多文化社会学部　　首藤明和
Mail：shuto@nagasaki-u.ac.jp
TEL/FAX: 095-819-2921　（研究室直通）

■会場へのアクセス

長崎空港から

長崎空港から長崎市内へは、到着ターミナル出てすぐのバス停より出ている高速バスが大変便利です。予約は必要ありません。コンパクトな空港なので、バス停への移動に時間がかかりません。

会場の長崎ブリックホールへは、4 番乗り場のバスにご乗車いただき、「茂里町」バス停（ココウォーク茂里町バス停）で下車ください（約 50 分）。

長崎市内の新地や JR 長崎駅に行く場合、5 番乗り場でバスにご乗車ください（約 40 分）。

長崎大学や浦上に行かれる場合には 4 番乗り場から乗車してください。

料金は、片道 900 円ですが、往復で乗る場合には 2 回券（1600 円）がお勧めです。自動券売機やバス運転手より購入することができます

福岡方面からの移動

JR 博多駅から特急かもめが長崎駅まで出ています。終着駅の長崎駅より 1 駅前が浦上駅です。浦上駅から会場の長崎ブリックホールへは徒歩５分です。

福岡空港からは「九州号」という高速バスが出ています。所要時間は 2 時間半くらいです。ご乗車の際は予約が必要です。以下をご覧ください。

「九州急行バス」（http://www.nishitetsu.ne.jp/kyushugo/reservation/）

自動車の場合

ブリックホールや近隣のココウォークには有料駐車場があります。

レンタカーの場合、福岡空港で借りて、長崎空港で返却しても、乗り捨て料金がかからない会社もあります。

■会場付近の地図

①大会会場（長崎ブリックホール）

長崎ブリックホール

〒852-8104　長崎市茂里町 2-38

TEL.095-842-2002

FAX.095-842-2330

Mail.info@brickhall.jp

＜アクセス＞

・ＪＲ浦上駅から徒歩 5 分

・路面電車あるいはバス：茂里町停留所下車徒歩 3 分

＜隣接市営有料駐車場＞

・駐車場収容台数： 152 台

・出入庫時間： 8:00～22:00

・料　金： 最初の 30 分 130 円、その後 30 分毎に 120 円

・大会会場：長崎ブリックホール３階

・大会一日目：「国際会議場」（記念講演、大会主催校企画シンポジウム、総会）
「会議室２」「ラウンジ」（会員控室）
「会議室１」（理事会室）

・大会二日目（午前）
「会議室１」「会議室３」「会議室５」（自由報告）
「会議室２」「ラウンジ」（会員控室）
「会議室４」（理事会室）

・大会二日目（午後）
「会議室１・２・３連結」（中日社会学学会専門委員会設立記念シンポジウム）
「ラウンジ」（会員控室）
「会議室４」（理事会室）

②懇親会会場（ベストウェスタンプレミアホテル長崎・３階）

懇親会会場は、長崎ブリックホールより徒歩約 10 分です。

ベストウェスタンプレミアホテル長崎
BEST WESTERN PREMIER Hotel Nagasaki
〒850-0045 長崎県長崎市宝町 2-26
TEL ： 095-821-1111
FAX ： 095-823-4309

長崎空港から
・長崎空港（４番乗り場）より高速バス（浦上経由）で 55 分宝町バス停下車
・長崎空港（５番乗り場）より高速バス（出島道路経由）で 46 分宝町バス停下車

■中国便り―生活の中からの社会学

北京事情：中学校の母親ボランティア

文俊（北京語言大学）

「幼昇小」（小学校入試）、「小昇初」（中学校入試）、「初昇高」（高校入試）という言葉が今すっかり中国の社会に定着していることが物語るように、昨今の高等教育システムの拡張があったにもかかわらず、中国の大学までの教育は依然として熾烈な競争に満ちている。そんな中、北京在住の筆者は、「幼昇小」にこそそれほど悩まずにすんだが、「小昇初」段階では、御多分に洩れず、５年生後半からの塾の通い詰め、履歴書作りと名門校廻り、数え切れないほどの筆記試験と面接試験の送り迎え、そして結果待ちの焦燥感を全て経験し、ようやく息子を念願の中学校である北京十一学校（以下、同校と呼ぶ）に送り込むことができた。そこで、筆者は初めて母親ボランティア（実際は、父親の参加も稀には見られるが、母親の参加が人数、回数、および参与度などにおいて圧倒的だった）の驚くべき熱意と実力を目にし、自分もそれに加わり、さらに一つの社会事象として興味をもつようになった。以下では、主に 2015 年 9 月～2016 年 4 月の間の同校一年生（中高一貫クラスは 280 人、普通クラスは 457 人）の母親たちのボランティア活動を、同校の徳育の責任者である雷先生へのインタビューから得た情報を交えて、長期的活動と定例イベントにわけて紹介していく。

同校では、親たちをボランティア活動に誘うようになったのは 2012 年に入ってから。きっかけは、雷先生が日常的な作業に人手不足を感じたためだった。そして、ボランティアを主としてお願いしているのは新入生の親たちだという。なぜなら、中一は子どもたちが新しい環境とリズムに慣れるのに最も肝心な一年だと考えられているため、親たちが最も重視し、その手助けに力を惜しまない時期だからだ。また、親としてもボランティア活動を通して学校をより深く知ることができ、同校の先生と多く接するチャンスも得られる。そして、ボランティア活動がれっきとした社会貢献活動だという認識も浸透している。子どもが中二に上がると、長期にわたるボランティア活動を次の新入生の親たちに委譲し、経験者の親たちは一部を除いて指導・助言の立場に退く。

同校では現在、長期的に母親ボランティアに頼っているのは制服センターの管理とゲーム取り締まりの二つ。主力となるのは専業主婦の母親と、仕事に融通がきく母親たち。週５日、シフトを決めて担当している。同校は制服のバラエティ豊かさで全国でも有名で、種類は 40 種類以上にも及ぶため、制服センターに展示してある制服を試着確認した上で提携する業者のサイトで注文することになっている。制服センターでは昼休みと放課後の時間帯にそれぞれ母親ボランティア一人と職員一人（関わる職員は二人いるが、他の仕事もするので、常駐ではない）が、主に制服の展示品の管理と、制服の試着の手助けを行っている。昨年末から、遺失品取扱の仕事も他の部門から廻され、届けられた遺失品を整理し、定期的に写真に撮り、同校のウェブサイトにアップロードしている。そこでは、ボランティアリーダーのような存在がいなく、シフトはみんなで相談し合った上で、職員が取りまとめている。通年合計 10 人の母親ボランティアが働いている。

一方、ゲーム取り締まりというのは、親たちの要望を汲み取り、学生がゲームに没頭するのを防ぐために、昼休みと放課後の時間帯に食堂を中心に、キャンパス内を巡回する活動。昨年の企画・試行段階を経て、今年に入って正式にシフトを組んで実施した。仕事のすき間をみて参加している母親もいるので、

都合が悪くなる場合も多々ある。そのため、毎週シフトを組んでメンバーのみんなに都合を確認してもらっている。毎回教員一人と母親ボランティア二人が廻ることになるため、総勢 20 人の母親がそのボランティアについている。

ちなみに、制服センター管理もゲーム取り締まりも、ボランティア募集に QQ と Wechat というアプリ（両方ともテンセントが開発。前者が 1999 年に、後者が 2011 年に公開）を活用している。特にモバイルネットワークが急激に進む中国においては、Wechat が重要なコミュニケーションツールとなっている。QQ にある 2015 年入学生の親によるボランティアグループのメンバー数は 93 人、Wechat にあるゲーム取り締まりボランティアグループのメンバー数は 33 人。

同校のボランティア活動はその二つの長期的活動にとどまらない。イベントがある度に、都合のつく母親が幹事の役を買って出て引き受け、一年生の親たちが入っている Wechat の大きいグループで（親たち全員が入っているわけではなく、現時点では 381 人入っている）召集をかける。紙幅の関係で詳しくご紹介できないが、年末恒例のカーニバルとサウジアラビア文化祭（といっても 2 時間だけ）で動員されたボランティアの人数、役割分担と準備期間だけを見てみよう。カーニバルでは三日前に担当教員の要望に応じて、総勢 50 人の親（うち男性 2 人）が動員され、主に化粧(午前中全校大会で出演する学生の)、軽食、服装（仮装の貸与と返却)、各教室のゲーム補助員、秩序整理、案内などの作業を担当した。サウジアラビア文化祭では一週間前から母親ボランティア 22 人が動員され、服装（ファッションショーの部分は全て母親の手作り)、食事（イスラムのゲストが食べられるよう回族の母親が担当)、化粧、撮影、雑務を担当した。むろん、すべての連絡は Wechat を通じてなされていた。

ここまで、同校新入生の母親によるボランティア活動について一通り見てきたが、筆者は特に次の三点について注意を喚起したい。まずは日本の PTA との違い。同校では実際は各学年に PTA（家委会といい、今の学年はメンバーが 30 人）が存在するにも関わらず、ボランティア活動の組織は PTA の力を借りることもなく、組織の仕組みと親たちが実際に果たす役割はルーズな関係にあるのはなぜか。

そしてボランティア活動の主役。日本の教育ママ同様、中国においても、学校と家庭とのパイプとなるのは女性。その意味で女性がボランティア活動の主役になるのも必然的帰結と考えてよいのか。

最後は母親ボランティア研究の可能性。そもそも、中国におけるボランティア研究においては、親としてのボランティアの存在は影が薄い。筆者が「家長志願者」のキーワードを CNKI で検索してみたところ、論文の質は別として、29 本ヒットした。そのうち、幼稚園段階の親ボランティアに関する論文は 18 本（うち修士論文は 1 本)、小学校段階の親ボランティアに関する論文は 8 本、残りの 3 本はアメリカの学校教育における親ボランティアの役割についての紹介だ。この影の薄さは何によるものか。この分野は本当に研究価値がないのか。この分野に限っていえば、中国はまだ入り口にも来ていないのが現状だといえよう。

以上、一方的な筆者の疑問の提起で申し訳ないが、このレポートの結びと代えさせていただく。

■会員の研究動向コーナー

朴紅『中国国有農場の変貌 - 巨大ジャポニカ米産地の形成 - 』筑波書房、2015 年。

鍾家新『社会凝集力の日中比較社会学 - 祖国・伝統・言語・権威 - 』ミネルヴァ書房、2016 年。

宇野重昭・江口伸吾・李暁東編『中国式発展の独自性と普遍性 - 「中国模式」の提起をめぐって - 』国際書院、2016 年

水野博達、翻訳：郭芳・董申琪・方靖「(解説) 日本の要介護認定システムについて」、2016 年　　(内容は、下記参照)

(解说) 日本的护理认定体系

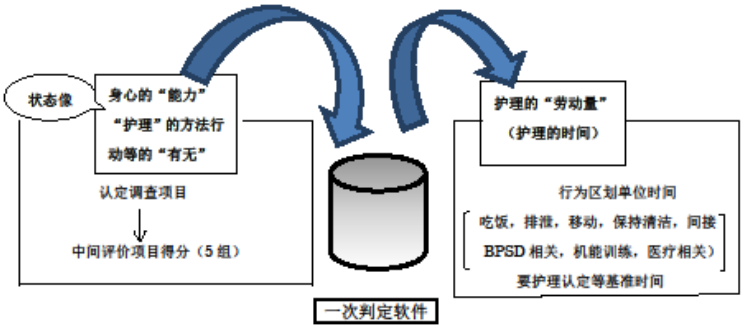
(日本語原文「(解　説) 日本の要介護認定システムについて」)

●报告人：水野 博达　(大阪市立大学创造都市研究科教员)

●笔译监修：郭 芳 (同志社大学助手)　●笔译：董 申琪 (大阪大学人间科学研究科硕士研究生)

●笔译：方　靖 (神户大学人间发达环境学研究科硕士)

(資料編・17 頁)　需要护理认定　基本設計



这个文本是应南京市社会福利服务协会 (会长・钱国亮) 的请求，把水野博达在 2015 年 9 月 16 日南京市社会福利服务协会研修会上报告的内容，分为本文和资料两部分编辑成的。

这个教材的著作权属于报告人大阪市立大学大学院创造都市研究科教员・水野博达和笔译监修郭芳，除了在南京市社会福利服务协会的进修和研究活动上利用之外，在没有本教材的著作权者的许可下禁止复写和出版。

このテキストは、南京市社会福利服務協会 (会長・錢国亮) の求めに応じて、2015 年 9 月 16 日に南京市社会福利服務協会の研修会で水野博達が報告した内容を整理し、本文と別紙資料編に分けてテキスト風に編集し、中国語に翻訳した**本文と資料編でＡ４３８頁の冊子**である。

このテキストを希望される方は、下記の下線で示したメールアドレスに、お名前 (できれば所属も)、送付先、必要冊数を連絡下さい。実費 (印刷費と国内郵送料込み@５００円) でお送りします。

◆ 本テキストに関する日本での問い合わせ、連絡先 ◆

〒530－0001大阪市　北区　梅田1丁目2－2－60　　大阪駅前第2ビル6階

℡06－4799－3700／ E-mail mizuno@gscc.osaka-cu.ac.jp

又は　　〒558－0012

大阪市　住吉区　我孫子東3－7－9－202

水野　博達／E-mail afbdr307@lime.plala.or.jp

■新入会員の声

劉昊(りゅう　ほう)
所属：早稲田大学大学院人間科学研究科博士後期課程
研究領域：異文化間教育

会員の皆様、はじめまして。早稲田大学大学院の劉と申します。私は北京生まれで、8歳の時に両親とともに広島県に渡りました。私は現在、在日中国人ニューカマーの教育に関する研究を行っております。私自身がニューカマーの子どもだったため、思えばその時の経験が現在の自分を形作っているように思います。現在は、中国人ニューカマーの教育戦略やホーム意識に関心を持っております。主要業績としては、【「外国人散住地域における在日中国人ニューカマーの『創造的教育戦略』」『移民研究年報』21号、2015年】などがあります。日中社会学会では、皆様方からいろいろ勉強させていただければと思います。これからよろしくお願いいたします。

秦勤　(シン　キン)
所属：名古屋大学文学研究科日本文化学講座博士後期
研究領域：映像研究

会員の皆様、はじめまして。この度、新たに入会させていただきました、名古屋大学の秦勤です。研究テーマは中国と日本におけるクィア映画祭です。

クィア映画祭は、1960年代から70年代にかけて興隆したゲイ解放運動及び女性解放運動の影響の下、アメリカのサンフランシスコ市で生まれた映画祭です。アジアでは1980年代に入ってからクィア映画祭が登場しました。1989年に誕生した中国の香港同志映画祭はアジアで最大の規模であり、一番長い歴史を持っているクィア映画祭と言えます。一方、1992年に始まった日本の東京国際レズビアン＆ゲイ映画祭は、香港同志映画祭と並びアジア最大規模を誇っています。2000年以降、クィア映画祭は多くの地域で開催されるようになってきたが、それにつれ、異なる映画祭の間で上映作品をめぐる交渉や組織者たちの連繋が発生してきました。中国の北京クィア映画祭（2001年－）と日本の関西クィア映画祭（2005年－）はその代表的な例です。

日中社会学会では、日本と中国語の地域の比較および影響関係などについて、いろいろと勉強させて頂きたいと思います。今後、学会の皆様からのご指導をいただければ幸いに存じます。よろしくお願い致します。

■事務局からのお願い

□メルマガ届いていますか？

本学会では、googleグループによるメーリングリストによる広報を行っています。事務局へご登録いただいたメールアドレスへ、不定期に「日中社会学会メールマガジン」が配信されます。メールマガジンが届いていない方や未登録の方、また、メールアドレスに変更のあった場合は、事務局までお知らせください。

□情報をお寄せください

会員の皆様で、出版物のご案内や研究会・シンポジウムの開催のご案内などがございましたら、事務局まで情報をお寄せください。

□会費納入のお願い

学会活動は皆さまからの会費で支えられております。会費納入をよろしくお願いいたします。一般会員6000円、学生会員4000円です。

日中社会学会・郵便口座

口座記号番号：00140-9-161801　加入者名：日中社会学会
加入者名：日中社会学会
＊インターネットバンキング等、銀行からのお振込みの場合は、店名、口座番号は下記なります。
　店名：〇一九店　店番：019　口座番号：0161801

＊海外からはpaypalでの納入も可能になりました。詳細につきましては、事務局までお問い合わせください。

日中社会学会ニューズレター No.75
編　　集：賽漢卓娜（長崎大学）
発　　行：日中社会学会事務局
〒186-8601 東京都国立市中２－１
一橋大学・南裕子研究室
info@japan-china-sociology.org
yminami@econ.hit-u.ac.jp
tel: 042-580-8810（研究室直通）
fax: 042-580-8799（共同研究室のため南宛を明記してください）
〇日中社会学会・郵便口座
口座記号番号：00140－9－161801
加入者名：日中社会学会
〇日中社会学会・公式HP
http://www.japan-china-sociology.org/
発行日：2016年5月